

認知症疾患医療センター

センター通信

令和3年度



活動報告

3月8日に長野県が主催する県内の認知症疾患医療センターが集まる連携会議に参加してきました。

来年度の長野県の方針として、『チームオレンジ』に関する活動、若年性認知症に関する活動を強化するようです。

チームオレンジとは認知症サポーターが単独ではなく、様々な人たちと一緒にチームで認知症の人とその家族を支える2019年度からの仕組みです。

これらの問題についても地域で一緒に考えて行きましょう



【認知症介護に正解はありますか？】

センター長 中居 龍平 医師

コロナ禍で移動もままならない状況ですが、最近『認知症介護の標準化』に関する研究に触れる機会がありました。暴言・暴力にどのように対応すれば最も有効で安定をもたらすか、いわゆる正解を探し出そうという研究ですがなかなか困難な様子です。

私たちが要介護者の「怒り」という感情に遭遇した時は背景となる要因を探り、具体的な原因があれば修正対応を行うことが基本となります。ですが要介護者が認知症関連疾患にある時は、明確な原因がわからないままに対応することが多いのではないのでしょうか。排泄・摂食意欲など原因が明らかになれば多くの適切な対応を実施して解決という事になりますが、実際には成功するケースは多くはないようです。



他方、認知症ケアに関する手技関連もこれまで多くの提案がされてきました。最近でも『ユマニチュード』というフランス式の優しい介護をうたったケア技術も提案されています。ただこういった手技も個別事案では有効性があるようですが、残念ながら現時点では誰に対しても明確で有効性があるとは示されていません。

それではいわゆるケア技術は全く無意味で無効なのではないでしょうか？

これまで認知症の介護というと家族介護の負担から悲惨な事例が多く、心を痛めることが多いのは事実ですが、介護技術が全く無効とは思えません。

それでは介護に有効な技術とはなんのでしょうか。大切なのは二面的に対応する技術だと思われれます。



家族介護者の多くは要介護者の問題行動に直面した時に、感情的に受け止めるという一面对応を行っているように思います。

それに対して、介護職にある方は感情的な受け止めとともに、客観的視点という二面的に対応する力を持っているように思われれます。

この客観的視点とは、職業的スキルや知識、経験によって培われていく事になります。介護職にあっても要介護者の「怒り」という感情・情動に対して、感情面でしか受け止めることができないときは、有効な対応に結びつくことは少ない気がします。

これらをふまえて冒頭の「認知症介護に正解はありますか？」に立ち返って考えてみますと、正解は場面によって異なりますが、適切な対応というものは存在していると思います。そしてその「適切な対応」にたどり着くためには、自分の内にもう一つの冷静な客観的視点を持つことが

近道なのではないかと思われれます。



お薬手帳 という 【 健康日記 】

薬剤師 宮崎優



【 はじめまして 】

1年程前に病院薬剤師を舞台にしたドラマ「アンサングシンデレラ」(コレ、漫画もあるんです)が放送されましたが、石原さとみさん演じる主人公並みの活躍を目指し、日々悪戦苦闘しております(笑)。

私たち病院薬剤師ですが、当疾患センターにおいてはお薬に関する情報を調べまとめて医師に報告するお仕事をさせて頂いております。

今回は医師や薬剤師などがお薬の情報を得る時に非常に役立つくれる「お薬手帳」について少しお話をさせて頂きたいと思います。



【 お薬手帳＝超重要な情報源！ 】

薬局でお薬をもらう際、

お薬と共に渡される手帳が「お薬手帳」です。

お薬手帳は1993年日本国内の患者15人に、別々の医療機関から抗ウイルス薬ソリブジンと抗がん剤フルオロウラシルが処方され、併用により死亡に至った「ソリブジン事件」がきっかけで導入されました。

また、その2年後の1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災では災害時特例で「お薬手帳があれば処方箋がなくてもお薬をもらう」ことができ、この災害も、お薬手帳が急速に普及する要因となりました。

このような事故や災害に限らず、お薬手帳は役に立ってくれます(“薬”だけに！笑)。

救急の場面では、薬の副作用や脳梗塞などの何らかの健康事象が発生した場合、その状態に至るまでにどういう経緯・出来事があったのかを知ることで、医師はより綿密・正確・迅速な診療ができます。

特にお薬手帳は、いつでもこの医療機関からどんな薬が処方されてどういう風に飲んでいただのかなどお薬に関する情報を得ることができる超重要アイテムなのです。

【 なので、さらなる活用を！ 】

ただ、日頃お薬の鑑別をしていて「お薬手帳ってラベルを貼るだけの台紙になっているな」と感じる時が

あります。

多くのお手帳の最初のページにはアレルギーや既往歴など、基本的な情報に関する記入欄がありますが、そこへ記入されている方はちらほら…というのが最近の印象です。

しかしご本人やご家族さんにお話を聞いていくと、実はアレルギーがあったり、意外に市販薬をたくさん使用していたり、お薬は定期的にもらっているけれど全然飲んでいなくて残薬がたくさんあったりと、ラベルだけでは分からないその人のお薬との「付き合い方」が見えてきます。

お薬の飲み忘れはどれくらいの頻度か、かみ砕いて飲んでしまうのか、錠剤はシートから出しにくいのか。

今日は血圧が170と高かったとか、頭が痛かったからロキソ●ンSを15時頃白湯で1錠飲んだとか。そんな情報もどんどん書き加えてお薬手帳を“補完”して頂ければ、その手帳ひとつでかなりの情報になり、一読するだけで診療がスムーズになっていくはず

です。ですので、医師や薬剤師へ向けた「健康日記」だと思って是非活用して頂きたいのです。

「えー。書きこむなんてメンドクサイヨ。」

…なんて人は、いつもお薬をもらいに行く薬局薬剤師に前回から今回の受診までにどんなことがあったか、報告がてら気軽に話してみして下さい。



【 おわりに。 】

幸い、今はかかりつけ薬剤師などの制度があり、気軽に薬剤師に相談することができる時代となりました。

私たちは病院の中の薬剤師ではありますが、地域の皆様の健康の一助になればと考えています。

「あ、相談してみたいな」なんてことがありましたら、当院疾患センターを通じてご相談下さい。また、外来診療時間であれば、当院会計窓口に向かって左横に薬局窓口がありますので、お気軽にお声がけ下さい。

◀ ヒトコトまとめ ▶

お薬手帳(健康日記)と薬剤師を是非ご活用下さい。

医療法人社団 敬仁会 桔梗ヶ原病院

〒399-6461 長野県塩尻市宗賀 1295

電話番号 : 0263-54-0012

F A X : 0263-52-9315

桔梗ヶ原病院

認知症疾患医療センター

直通電話番号 : 0263-54-7880

F A X : 0263-54-7881

Eメールアドレス : geriatric-medicine@keijin-kai.jp